

第2章 2019年慢性透析患者の動態

1. 臨床背景

2019年の患者調査票において、性別、年齢が記載されていた人数は332,599人であった。このうち男性は218,552人、女性は114,047人で、全体の平均年齢は69.09歳であった（図4、補足表4）。平均年齢は年々上昇傾向を示している（図5、補足表5）、最も割合が高い年齢層は男女とも70～74歳であった。また65歳未満の患者数は2012年から減少し、70歳未満の患者数は2017年から減少している。つまり、わが国の慢性透析患者数の増加は、70歳以上の患者数の増加によるものであることがわかる（図6、補足表6）。

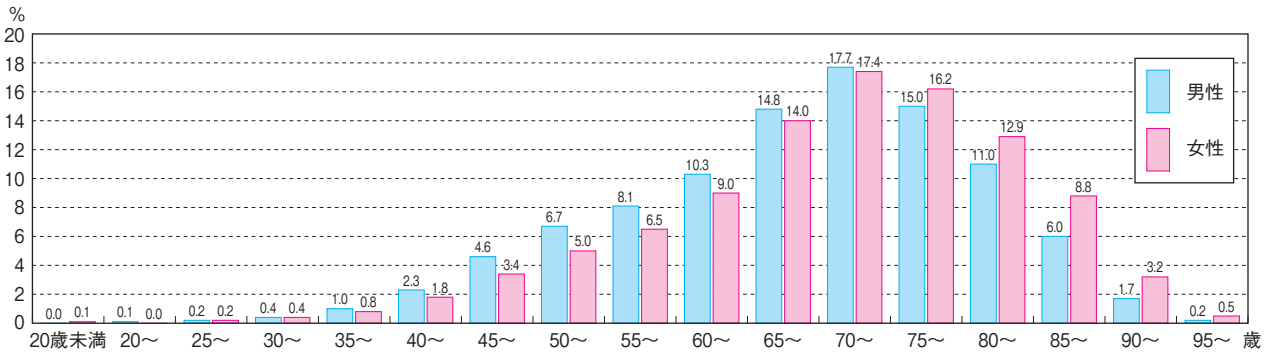


図4 慢性透析患者 年齢と性別, 2019

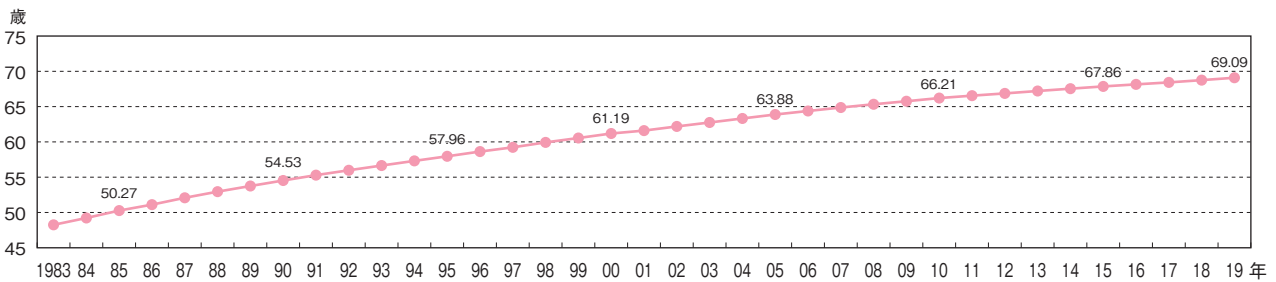


図5 慢性透析患者 平均年齢の推移, 1983-2019

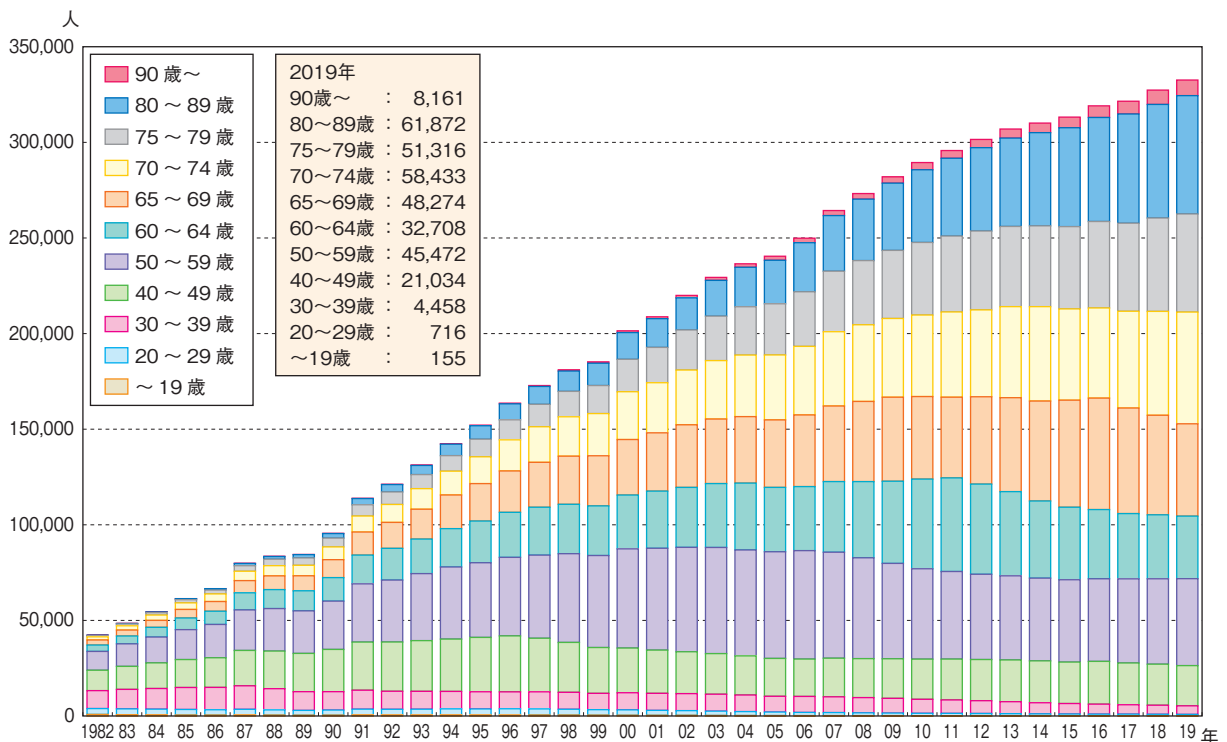


図6 慢性透析患者 年齢分布の推移, 1982-2019

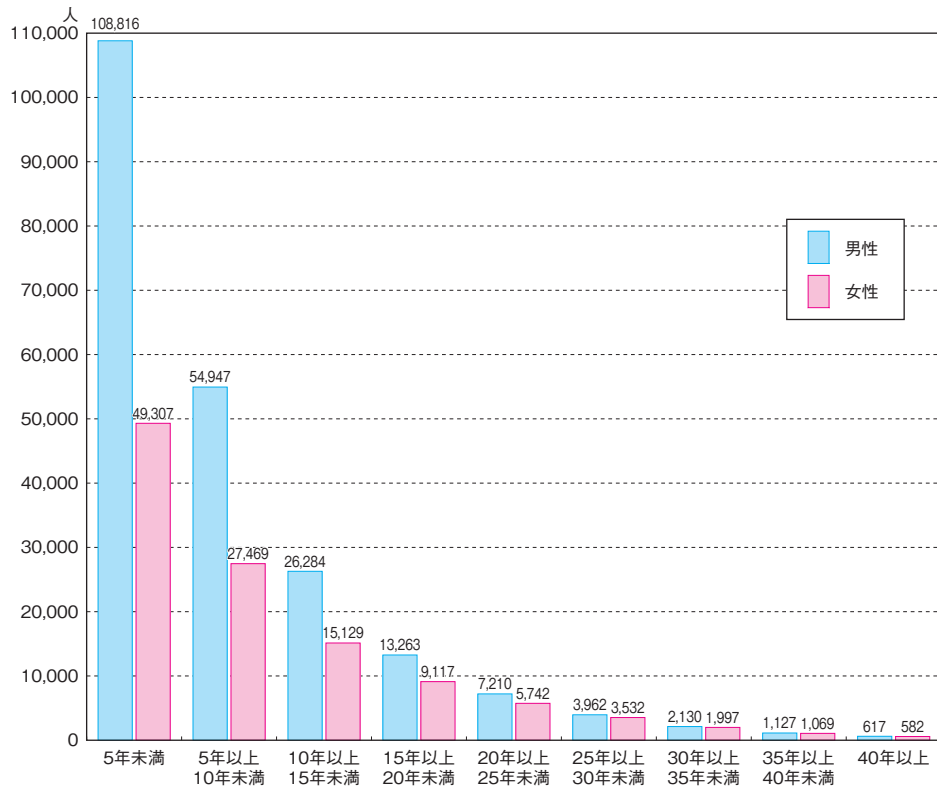


図7 慢性透析患者 透析歴と性別, 2019

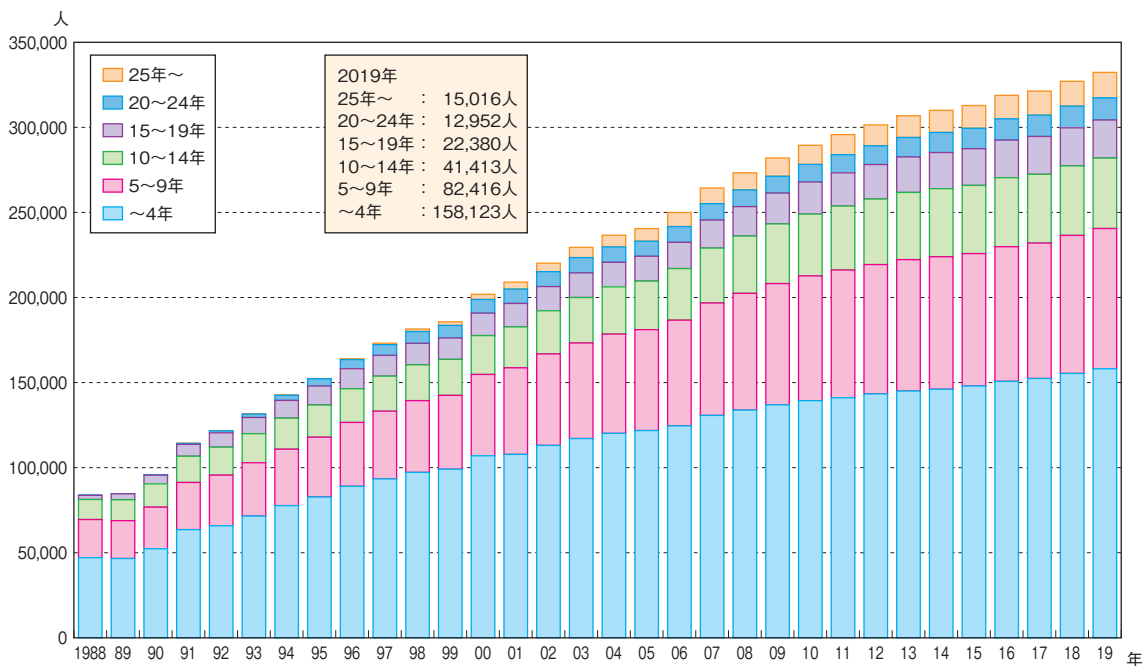


図8 慢性透析患者 透析歴分布の推移, 1988-2019

2019年末時点の慢性透析患者の平均透析歴は男性6.82年、女性8.37年、全体で7.35年であった。透析歴5年未満が全体の47.6%を占め、透析歴20年以上は8.4%、30年以上が2.3%、40年以上が0.4%であった（図7、補足表7）。最長透析歴は51年4ヵ月であった。透析歴の長い患者は増加しており、10年以上の透析歴を持つ患者が27.6%に達している。1992年末には1%に満たなかった透析歴20年以上の患者は、2019年末には8.4%に達している（図8、補足表8）。

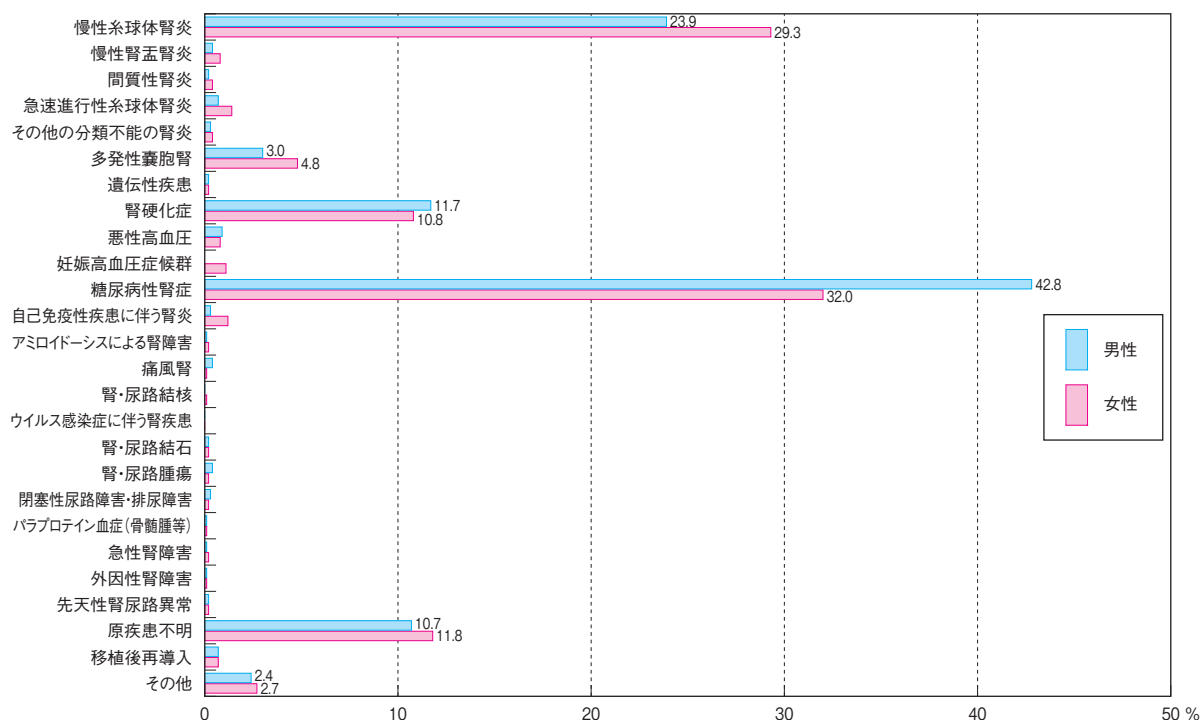


図9 慢性透析患者 原疾患と性別, 2019

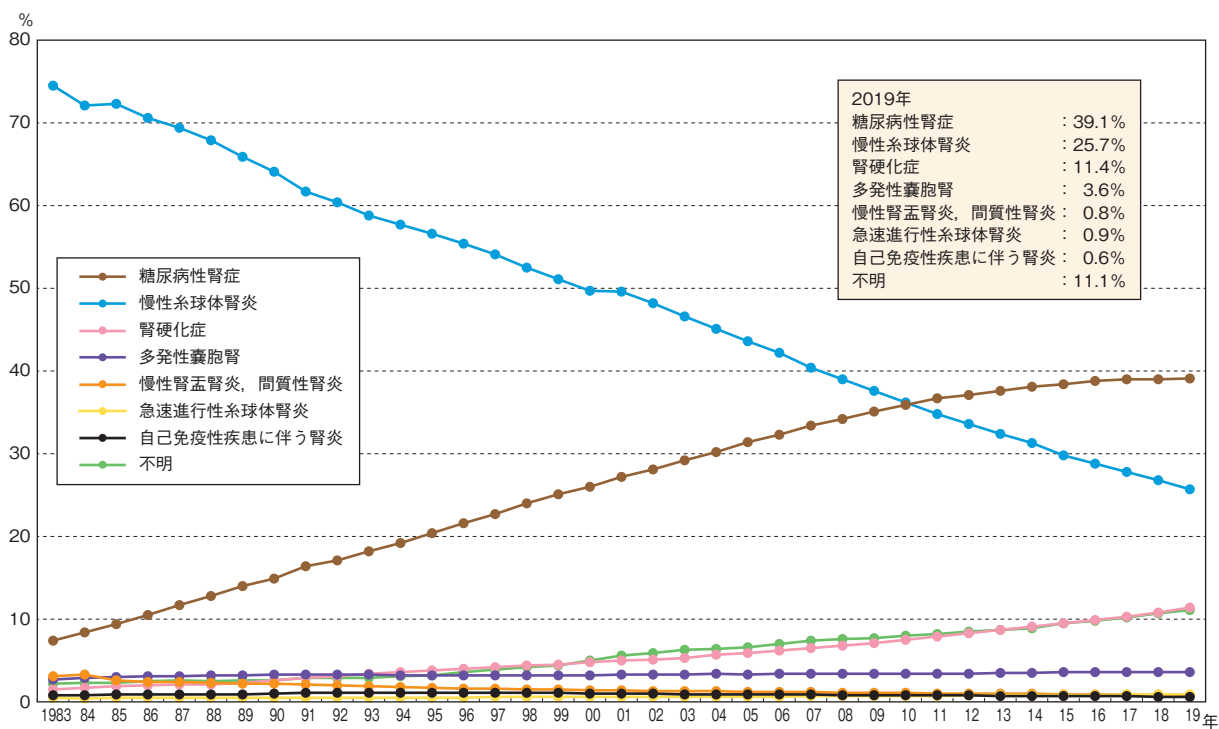


図10 慢性透析患者 原疾患割合の推移, 1983-2019

2019年末時点の慢性透析患者の原疾患で最も多いのは糖尿病性腎症の39.1%で、次いで慢性糸球体腎炎が25.7%、腎硬化症が11.4%であった（図9、補足表9）。糖尿病性腎症の割合は、2011年に慢性糸球体腎炎に代わって原疾患第1位になって以降も持続的に上昇しているが、近年は微増から横ばいを推移している。慢性糸球体腎炎は直線的に減少し、腎硬化症、原疾患不明は持続的に上昇している（図10、補足表10）。なお、原疾患コードは2017年末調査で一部変更しており注意が必要である。

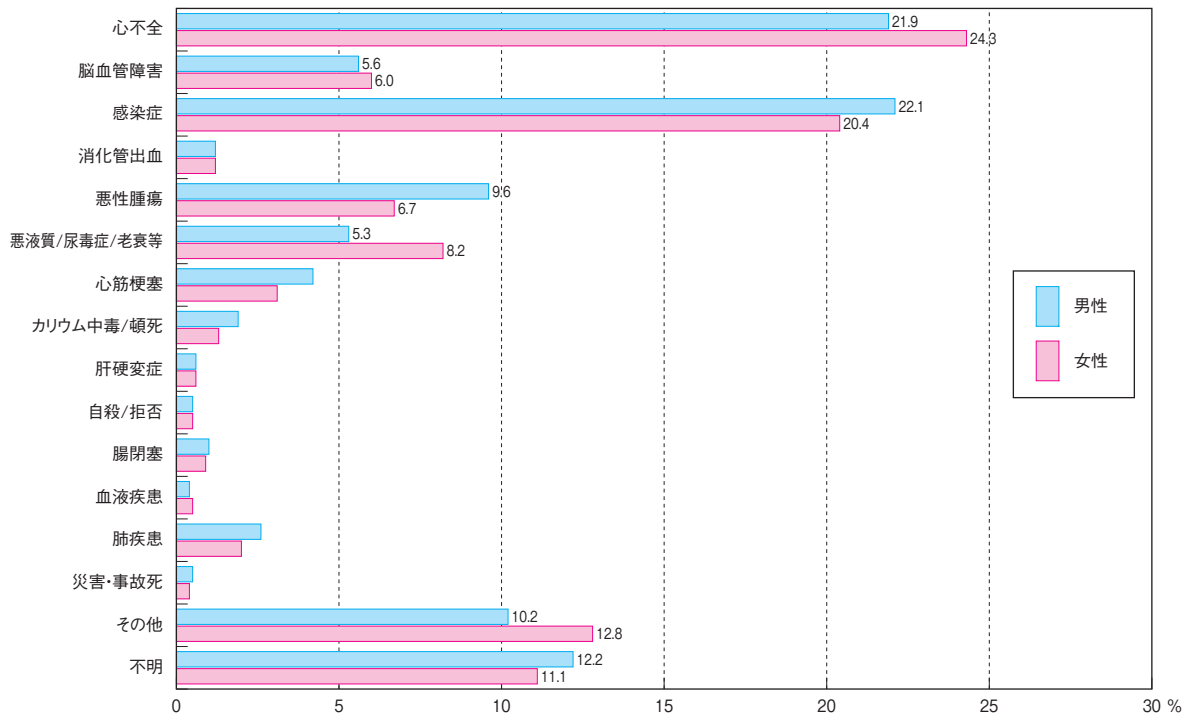


図 11 慢性透析患者 死亡原因と性別, 2019

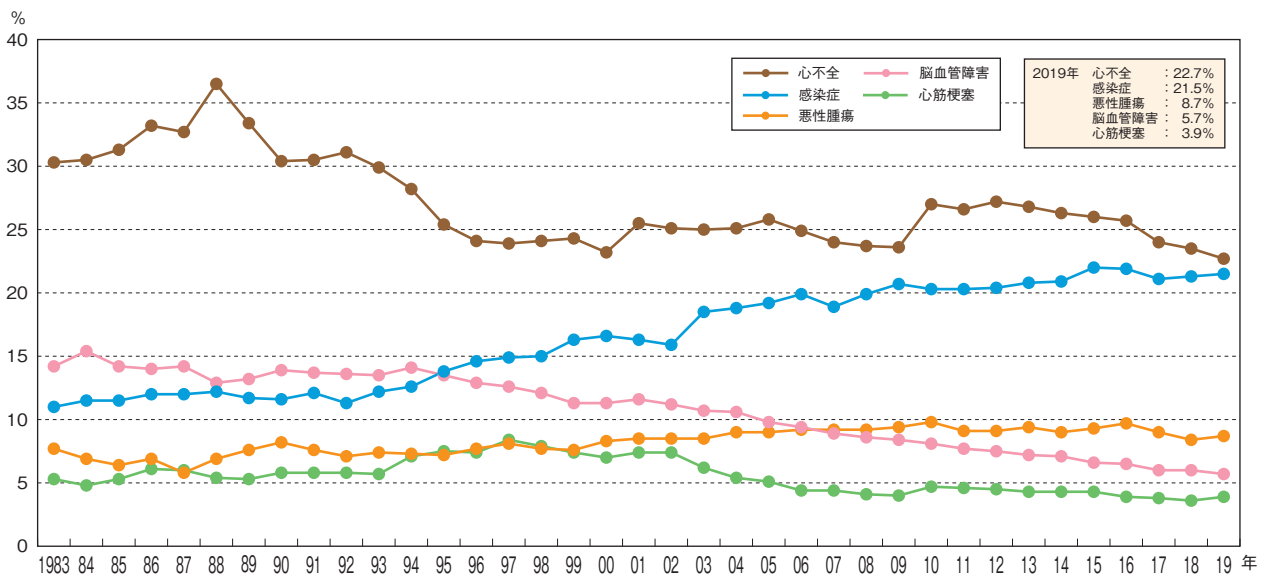


図 12 慢性透析患者 死亡原因割合の推移, 1983-2019

2. 死亡原因

2019年の施設調査票では、34,642人の死亡が報告されていたが、患者調査票において死亡原因と性別が記載された患者数は31,905人であった。死亡原因は多い順から心不全、感染症、悪性腫瘍であり、それぞれ全体の22.7%、21.5%、8.7%であった。その他は全体の11.1%であった。心不全、脳血管障害、心筋梗塞を併せた「心血管死」の割合は、32.3%であった（図11、補足表11）。

死亡原因の推移では、1983年から心不全による死亡が最も多く、1995年以降、25%前後で推移していたが2013年以降漸減傾向にある。一方、感染症による死亡は1993年以降、増加傾向にある。脳血管障害は1994年以降漸減傾向にある。心筋梗塞による死亡も、1997年の8.4%をピークに漸減傾向である。悪性腫瘍死は1987年の5.8%を底に少しずつ増加していたが、2004年からは9.0%前後を推移している。前述した心血管死の割合は、1988年には54.8%であったが一貫して減少し、2019年には32.3%であった（図12、補足表12）。なお、本調査における死亡原因分類コードは、2003年末、2010年末、2017年末調査の3回改訂されていることに注意が必要である⁹⁾。

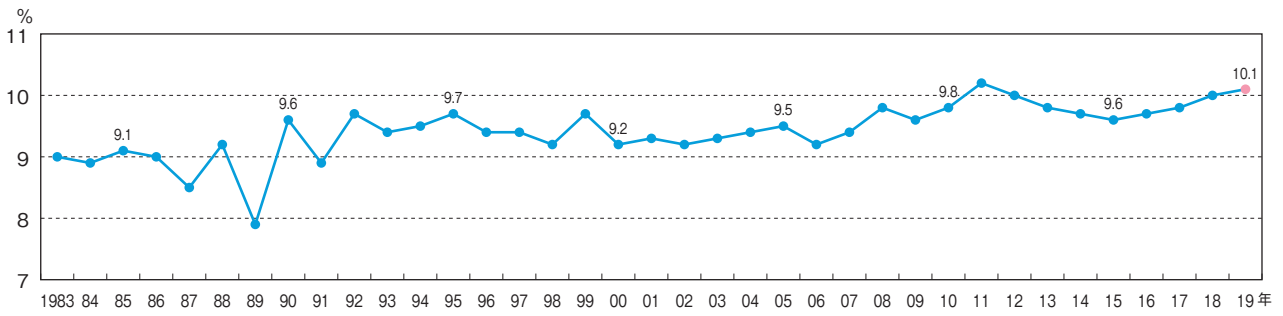


図 13 慢性透析患者 粗死亡率の推移, 1983-2019

3. 粗死亡率

施設調査における患者動態から年間粗死亡率を計算した。

$$\text{粗死亡率} = \left\{ \frac{\text{死亡数}}{(\text{前年患者数} + \text{調査年患者数}) \div 2} \right\} \times 100 (\%)$$

粗死亡率は、アンケート回収率が低かった1989年の7.9%が最低値を示したが、概ね9～10%で推移し、2019年末は10.1%であった（図13、補足表13）。